

LLAシニア会通信

No.1 August10, 2007

第2回 LLA シニア会

去る5月29日に第2回が開催された。(於「美登利亭」松戸)



出席者：左側手前から 大八木・石川・佐藤・栗山

右側手前から 鈴木・宇佐美・羽鳥・浅野

[LLA シニア会のこと]

2年ほど前に浅野が当時の大八木 LET 会長とメールで話し合っているときに、「LETは WorldCALL を迎えることにもなるであろうし、今後も発展していくことは間違いないが、われわれ LLA を知っている者には一抹の寂しさがある。単なる懐古趣味ではなく、長い間の実績について、まだまだ後輩に語り継ぐべきものがあるのではないか。そして、時には会合を持って話し合ってはどうか」ということで、何人か都合のつく方に集まっていたのが第1回の会合でした。別に堅苦しい会則があるわけではありませんから、どなたでもメンバーを自薦、他薦して参加してください。(浅野 記)

LLAへの思い

佐藤 仁

行く川の流れは絶えずして、しかも元の水にあらず、と言う。過ぎ去り行く時の流れに棹差し、よどみに浮かぶうたかたに永遠の命を求めるのも、意義あることと思われる。

私の LLA との出会いは、斉藤靖寛先生を通して行われた。彼は 1960 年に東京都中央区から杉並区の杉森中学校へ転勤してきて、当時同じ区のと泉中学校に勤務していた私と同じ研究会に属していた。彼は地域のリーダーとして教師仲間から畏敬され、研究授業などで会員を厳しく批判し指導した。やがて、西宮中学、武蔵三中から、1979 年に早稲田大学高等学院に転勤した。

この辺りで LLA という学会があることを知らされ、研究会に参加して学び始めた。ほどなくその事務局を手伝うように言われ、早稲田大学商学部で栗山先生や森田先生に紹介され、少しお手伝いをするようになった。

1983 年には、関東支部中学英語教育部会代表に推薦され、羽鳥博愛、浅野 博、國吉丈夫の三代に亘る支部長に任せ、15 年間その重責を果たすことになった。



「都立町田高校での研究会」(左から高橋・浅野・佐藤・当校校長・授業者の諸先生)

初めの3年くらいは、特に会運営のポリシーもなく、暗中模索し、行き当たりばつたりの活動をしていた。ところが中野区で研究会をもったある日、羽鳥支部長が飄然と現

れ会に参加し、励まして下さったので、「やるぞ！」という闘志が猛烈にわいてきた。

退任するまで88回の研究会を持ち、中学のみならず高校・大学・小学校で会を開いた。研究会の主軸は「研究授業」で53回行い、他に機器操作の研修会、宇佐美先生の尽力でNHKのスタジオ見学会など多彩な活動を実施してきた。

私は高額の公費を投じ、活用すれば成果が期待できるのに殆ど使わず、場所をとりメンテナンスにも費用をかけるような現状を黙視できなかつた。手弁当で、あちこちの中学や高校に出かけ、LLにある機器の操作や効果的な活用を共同研究した。

東京都は、1992年(平成4年)を期し、全都の都立高校にLLを設置する壮大な計画を立てた。私は、このLL普及の好機を捉え、高校での研究授業や機器操作研修にわが支部も組織的に力を貸すべきだと運営委員会などで力説した。しかし、高校の委員の中で積極的に引き受ける気配が伺われず、私は僭越ながら都立駒場高校長をやっていた中学時代の同窓生である高橋道彦先生の力を借りた。彼から、幾つかの高校を紹介してもらい、町田高校や立川高校などで活発な研究授業を行うことができた。

これらの研究会の具体的な内容は、かなり詳しく「仁のホームページ」の Part1の「Ⅲ. 教育機器を用いての英語教育」に述べてある。

➤ ここに特色的な実践として、**フローチャート**による研究授業を行ってきた事について述べておきたい。中学部会の記録を紐解くと、この専門用語がわが部会に出現したのは1991年であった。「SONY LL 通信」159号にも載せている中野9中に勤務していた大田和子先生の指導案だ。研究テーマは「ビデオを活用した授業」で、次には私自らが転任早々の練馬区立中村中学で行う羽目になって行い、「中学部報」No.18 や「SONY LL 通信」160号にその時使ったフローチャートを掲載した。テーマは、「アナライザーを多用した授業」であった。

流れ図を使った授業の展開、フィードバックなど、授業に大変有効な近代的な方法と思うが、初めてこれに接した先生方の中には違和感を持った方が多かつた。当時大田先生や私は、石川達郎先生のご指導を受けたが、その後斉藤靖寛先生を講師として「フローチャートの研修会」を持って、これに馴染み使えるように試みた。

しかし客観的に見てこれは難しい存在で、会のレベルを上げるものであると同時にLL やこれが、近代的な授業を嫌悪する傾向を生んだかもしれない。ある有名高校の先生は発表まで4回も書き直し、又ある同僚の先生は2時間も3時間も個人指導したが合点がいかず、斉藤先生の所に聞きに行き、本を何冊も借りてきて勉強した。



「練馬区立中村中学での研究授業」

私は、1998年に会員の諸先輩にいろいろお世話になり協力して頂き、全力を傾けてその使命達成に努力し、何らかの足跡を残し中学部長を辞した。何人の方から「後はどうなるの？」と惜しまれ、光栄に思った。

中学部会のホームページは、何回か要望したが旨く整理されて保存されないので、私の方で引き取り色や音楽を加え現在のような内容にし上げ表示している。

LLA, LETの功労者の「墓碑・菩提所」は、いずれ支部のホームページに安置されるのが妥当と思う。(2007. 06. 22.)

LLとCALLの狭間で

大 八 木 廣 人

‘WorldCALL 2008’ 誘致で LET は方向転換したのか？

先ず、2008年8月5日～8日に福岡で開催される‘WorldCALL 2008’に関することから始めます。‘WorldCALL 2008’を日本に誘致することが決まった頃、「LETはコンピュータ利用の外国語教育に方向転換したのか」と聞かれたことがあります。私は「そんなことはありません」とお答えしました。WorldCALL ConstitutionのMembershipの第1項に、‘members of established associations and organizations working in the area of Computer Assisted Language Learning (CALL) and Technology-Enhanced Language Learning (TELL) throughout the world;’と規定されていますし、主要団体のEUROCALLの要項にも同じようなことが書かれています。また、Peter Liddell, IALLT前会長に、

同会が目指す研究領域について質問してみますと、最近は CALL と TELL の他に WELL (Web-Enhanced Language Learning) も使われ始めているという返事が返ってきました。ですから、WorldCALL が目指すのは、コンピュータを利用した外国語学習だけではなく、科学技術を利用した幅広い分野を研究領域としていうことがはっきりしました。ただ、‘WorldCALL 2008’の研究発表の審査においては、CALL 研究重視の姿勢があるのは確かです。というのは、現在の‘WorldCALL 2008’の Chair を務めている Mike Levy (ATELL, Australian Association for Technology-Enhanced Language Learning 代表)とのメールのやり取りからそのような印象を受けているからです。とは言え、WorldCALL の使命の一つに、‘underserved countries’からのご招待というのがあり、これらの国々の研究者にも発表を義務付けてありますから、幅広い研究領域になるものと予想されます。

IALLT とは今後どのような関係になるか？

2005年8月に北米の Brigham Young University で開催された FLEAT V は IALLT の担当でしたから、順番通りにいけば、2009年か2010年に LET が日本のどこかで開催することになります。しかし、2008年に WorldCALL を開催した LET が、更に1, 2年後に国際大会を日本で開くことは不可能です。私は、FLEAT V に LET 会長として参加した折、IALLT の理事会の席に招かれて、将来の FLEAT 開催について LET の考えを聞かれました。LET の理事会等が出る意見の中に、FLEAT 継続の意義について疑問の声があったのも事実ですし、FLEAT は WorldCALL に吸収・合併されるという観測もありましたので、どのように発言すべきか迷いました。

私は、前年度の同じ時期に開かれた SLM(Summer Leadership Meeting)と、この年の大会を通じて、LET に対する IALLT 側の友好的で協力的な絆を強く感じていました。日本から参加した約60名の方々も大会滞在を心から楽しんでおられたように感じていました。とって、将来のことを私がその場で約束することはできません。そこで、私は理事会と懇親会の席ではありましたが、「LET と IALLT が長年築いてきた友情と信頼関係は是非とも継続したいものです。しかし、FLEAT をいつ日本で開催すると表明することはできません。というのは、2008年に WorldCALL を日本で開催する準備を進めているからです。その際は IALLT の皆様のご支援とご協力をお願いしたいと思っています。LET の若い会員たちがきつとこの貴重な信頼関係を継承してくれるものと信じます」というようなことを述べました。

ハード・メーカーは様変わりしたか？

LLA の頃の強力なハード・メーカー 4 社が LL や CALL 開発の分野から完全撤退又は縮小してしまっただことは、LET にとっても大きな打撃であることには違いありません。これらのメーカーの方々は、研究会などへも積極的に参加して、外国語教育の流れをよく知っていました。コンピュータ中心の新しいメーカーが格安の CALL 機器を発売し始めると、教育委員会等からの補助が受けられるという利点と相俟って、LL 教育とは縁の薄い安いハードがどんどん導入されていきました。しかし、従来ストックしてあったアナログの教材を利用しようとする、以前のように簡単に使えないとか、操作上の不慣れもあって、CALL 教室を利用しようとするに躊躇するところもありました。また、デジタル機器の操作は、計画的な授業への対応はよいものの、とっさの変更や微妙な修正を必要とする授業を実行しようとする、使いにくさに悩まされることもしばしば起こっていました。

とは言うものの、そのような試行錯誤の時期を経過した現在、LL 機器の機能を充分取り入れた新しい CALL が開発されつつあります。LL 教育で培った機能とデジタル化による、より効率的な機能を有機的に現場で生かせるような CALL 機器が市場に出てきました。これらの優秀な製品がどんどん設置されていけばと願わずにられません。

CALL 教材は作成されているか？

何を CALL 教材というかはっきりしていない現在、CALL 教室で何を教材としてよいのか迷っている人は多いだろうと思われます。アナログ教材を利用した LL 授業では、数多い音声テープやビデオテープ教材から選択することが自由にできましたし、気軽に自作教材で効果を上げている人も多かったように思います。しかし、CALL の機能を充分生かした授業にしようとする、教材選択の範囲は狭くなり、担当している学生のニーズや能力に合ったものを選ぶ選択肢は更に狭くなります。自作教材となると更なる研究が必要となります。CALL 授業用市販教材の種類は圧倒的に少ないこともあって、導入した CALL に付随している教材でお茶を濁している例もあります。

CALL 教材の特徴の一つに個人の能力に合った学習を可能にすることがあります。そのためには個別学習のためのタスクを作成するツールが必要になります。有料ソフトを揃えることが望ましいでしょうが、Hot Potatoes のような無料ソフトも現れて、ちょっと工夫すると自分で自由に教材を自主作成できるころまではきたように思います。とは言え、LL 教材作成時のように誰にでも容

易にできるとは限りません。ある出版社の依頼で、私は CALL 教材を作成したことがあります。そんな時は無料ソフトは使えず、相当の費用がかさみました。映像教材作成時と比較すると、恐らく二倍以上の時間と経費がかかったようです。だから、出版社も CALL 教材作成には簡単に乗れない事情もあるようです。この問題はこれからも簡単に解決するとは思えません。

LL指導あれこれ

羽鳥博愛

LLA に関係するいろいろな出来事については誰かが書くと思うので、私は LL での指導をめぐって感じたことを書くことにしたい。

(1)ドリルのさせ方

今ではそんな言葉を聴くことはなくなったが、LL での練習のさせ方について、four-phase drill と three-phase drill ということが問題になったことがあった。Four-phase というのはご存知のとおり、①まずテープのお手本の文を聞かせ、②次にそれを繰り返し言えるだけの時間を置き、③もう1度お手本を聞かせる、そして④ もう1度その文を言わせて、その文を身につけさせるというように、テープを作ったりドリルをしたりする方法である。

これに対して three-phase というのは④の段階を省いて、2回聞かせるだけで2回目の繰り返しの後には繰り返しの時間を設けないというやり方である。2回目の後に繰り返させないとドリルが徹底しないのではないかと不安に感じた人が少なくない。

しかし、私は three-phase で生徒に発音させたあと1度しか聞かせないというのに魅力を感じた。というのは、私はテープレコーダーを普通教室で使っているとき、テープのお手本を聞かせる練習をした後、次に生徒に発音させてからすぐその部分を聞かせると効果があるということを痛感していたからである。こうすると生徒は自分が良いと思って発音したところのどこが具合が悪いかをまさに直されたように感じるらしいのである。

この自分の発音の悪いとろろに気がつくということは難しいのだということに私たちは気がつくのに時間がかかったように思う。Four-phase drill をやっても生徒はテープを聞いただけでは自分ではなかなか具合が悪いところに気がつかない。それで LL の特徴であるモニターの効果が発揮されるのである。そんなことを悟るのにも時間がかかったように思う。

(2)聞かるときに何を見せるか—視聴覚的手法

音声だけを聞いて分からなければ本当に分かったのではない、絵を見せるのは良くない。この主張に対して、自然の状況では音声だけということは電話などの特殊な場合だけである、普通はなんらかの視覚的要素が含まれる、したがって絵を見て分かったら分かったと認めてよい。この論争を私は面白いと思った。

視聴覚的な種々の手段は物事を分かりやすくするというので用いられるが、音声だけというのはまさに視聴覚的手法を無視することになるように思う。視聴覚的方法の分かりやすさの解説によく E. Dale の「経験の円錐」が用いられるが、これは結局五感のできるだけ多くを使えば使うほど物事は分かりやすくなるということを示している。私はこのことへの理解にはお醤油とソースを区別するときのことを考えるとよいと思う。醤油とソースは色を見ただけでは区別できない。そこでにおいを嗅いでみる。それでも分からないとちょっとなめてみる、これはレストランなどで女の人がよくやっている。私は絵と音声の論争にはこんなことを考えた。

(3) ちょっとした工夫

視聴覚的に面白いと私が思ったのは LLA のある会するとき、大勢の参加者を前に金田正也氏がパネル・ディスカッションの司会をしていたときである。彼はこう言ったのである。「発言なさいたい方は、ただ手を上げるのではなくプログラムを手に持って振ってください。そうすると私のほうからもよく見えますから」と。動きも視覚に有効に働くので、まさに視聴覚方法の活用である。

視聴覚的発言で私の印象に残っているのに、見上晃氏の次の言葉がある。

「ビデオは全体を分からせるのにはいいんですが、何かに注意を集中させるにはイラストのほうがいいんです」。

今やビデオや実物投影機なども手軽に使えるが、目的に応じて適切に使い分けることが大切である。

オーバーヘッド・プロジェクターが全盛のころ、それを使いたくて仕方がない人は大きな会場なのに、トラペンに小さな字をぎっしり書き込んでそれを投影していた。あれはハンドアウトのほうがよいと批判された。今はパワーポイントを使いたくてもつぱらそれを使う人がいる。しかし、見て説明を聞くにはよいが、資料として保存するには不便だという反省も聞かれる。

LET は新しい機器の適切な使い方を示すことも考える必要があるのではなからうか。

LL再考

頼りになるLL——TELLの原点として

石川 達朗

(1) 以前、教育工学の全国大会で、必ず参加したのは、企業内研修部会であった。企業内教育(in-service training)は、限られた予算で所期の教育効果を収めなければならない。施設の上手な活用方法や予算の上手な使い方を学ぶことができた。企業内教育担当者は、決められた予算で所期の教育効果を収めることができなければ、職を追われることになる厳しい職場であった。

現代では、英語の基礎学力(English for General Purposes)も、業種が求める英語(English for Special Purposes—ESP)の力も採用試験以前に十分身につけておくことが求められている。採用試験を在学中に受けるとすれば、求められる英語力も在学中に身につけておくことが求められる。在学中に社内教育の前倒しとしての学習(pre-service training)が実施されている。

(2) 私の勤務先が応募した「人間力を要請するユニット別キャリア教育——社会に貢献できる自立した女性の育成——」が平成18年度文部科学省現代GP(現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム)のテーマとして採択された。この「人間力を養成するユニット」は4つあり、キャリア導入[導入]、自己探検[発見]、仕事探求[練成]、社会探求[完成]である。また勤務先では、平成16年度からキャ

リア教育を支援する基礎教育として、当該学科の1年次生に対して、「自然科学総合講義」と「人文科学総合講義」を毎週金曜日の午前中に課してきた。「人文科学総合講義」は進路・目標によるコース別のクラス編成で、Aコースは文芸・言語エリアと健康教育エリアなどの学生で、公務員・教員・上場企業(金融事務および総合職)への就職を目指す学生、Bコースは、デザイン・情報エリアとフードエリアとトラベル・観光エリアなどのコース、一般企業(一般事務・営業・販売)への就職を目指すコースである。公務員試験・教員採用試験・入社試験対策や社会人に求められる常識や進学先における発展学習や生涯学習にとって必須と考えられる「時事常識」、「国際社会」、「国語」、「英語」についての基礎学力を構築するものである。

(3) 「人文科学総合講義」「英語・採用試験対策(英語)(test smart)」に提示した講義の目標は、「公務員・教員・企業採用試験対策の一環として、英語常識の確認、英語問題の解法を通してSPIテストや採用試験における高得点を目指す」である。特に短大卒で、受験する地方公務員試験を視野に入れて目標を設定することに、受講生の合意を得た。

「人文科学総合講義」の「英語」についての先行研究である「英語学習におけ

る動機付けの持続に関する研究 (A Study of Sustainable Motivation in Learning English for Special Purposes : 石川達朗, 2006) の研究成果を活かし、「教材改訂と特別教室の活用による学習効果——動機付けの持続をうながしながら」(Good Practice through Tailoring Effective Materials and Comfortable Environment to Sustain Students' Motivation in Learning English for Special Purposes) を研究テーマとした。

授業は6回。そして exit test。ISO の委員と GP の委員から、PRE-TEST と POST TEST を工夫して実施して欲しいと申し入れがあった。そこで地方公務員の模擬試験問題4題を活用して PRE-TEST と POST TEST を実施することにした。和文要旨選択問題と英語表題選択問題である。今回は PRE-TEST (4点満点) に比べて POST TEST (4点満点) の得点平均は +12.5%であった。次回は今回以上に工夫をこらして挑戦である。

(4) Technology Enhanced Language Learning (TELL) の原点は、LL にある、と考えた。そうだ! Triadic Interaction も活用しよう。LL 教室を活用して授業の効率化を図ろう。授業は9時開始。8時30分から受講生が来室。質問が多くだされる。受講生同士の質疑応答など学びの時間。学び舎としての環境としてすばらしい。9時全員起立挨拶。配布すべき教材は、受講生が来室する以前に受講生卓に配布。予習・準備の大切さは授業担当者がお手本を示すことが肝要。受講生卓のモニターテレビを活用し、二人の受講生が情報を共有する。理想的な

Triadic Interaction が成立する。二人の間で brain storming が自然に生まれる。これは私語 (private conversation) ではない。創造活動の開始である。授業担当者が色マーカーペンで phrase recognition の経過を提示すると、受講生も真剣にこれを追って、自分のノートに写していく。授業担当者が意図的に手を休めても、受講生が先に作業を進めることできれば、受講生は独立した (became independent) ことになる。独立した二人の受講生が助け合うことができれば、'became interdependent' となる。

(5) この授業では質問が多い。用紙に質問を書いてもらい、回答はペーパー化して配布。解説には、授業担当者はヘッドセットのマイクロフォンから声を送る。受講生は各自のヘッドセットの音量を調整する。効率抜群である。

用紙に質問を書いてもらうと、sorting と ordering に便利。回答をペーパー化することで、editing out の実習も兼ねることにした。recognition のための style sheet で、要約の重要性を認識して、要約の方法を会得しながら、要旨選択や、表題選択の技も身につける。採用試験に合格することも大切であるが、就職後や社会へ出てからも困らないことを祈りつつ。

受講生は LL にすぐ馴染む。「うちのテレビがついていません」などと言います。自分の家の勉強机と勘違いして、荷物をそっくり置いていく受講生。やはり LL は優しい (thoughtful) ところなどでしょう。困った時の LL 頼みの巻、です。

LL から CALL へ

——40 年の経験を振り返って——

浅野 博

(1) LL 設置のための勉強

昭和 36 年(1961)には私は東京学芸大附属高の6年目を迎えていました。当時の校長は五十嵐清止先生(学芸大教授・心理学)でしたが、ある時英語教員に、「来月予算交渉をしに文部省へ行くから、英語科の希望をまとめてこい」と言われました。当時は英語科としては、タイプライターとテープレコーダーが各1台ある程度でした。そこで、6人全員に1台ずつといった要求をまとめて合計 40 万円くらいを提出しました。

ところがそれを見た校長は、「何だ、これは？百万単位の要求をしろよ」と言われたのです。そこで、「ああ、そうか。LL のことだ」と初めて認識した次第です。

当時はまだ LL を設置している学校は非常に少なく、英語科に経験者もいなかったもので、主任の安藤賢一先生が、「しばらく見学や勉強をするから日曜日を返上してもらいたい」と言われて、研究が始まりました。学校の見学は休日には出来ないのがふつうですが、納入したメーカーに頼めば、保守点検の名目で出入りが自由にできたのです。授業の様子を見ることはできませんでしたが、初心者には十分な説明を聞くことができ、操作の実際もある程度経験できました。

翌年の9月には、約 300 万円をかけて、54ブースの LL が完成しました。テープ

レコーダーはオープンリールのもので、テレビの設備もありませんでしたが、当時の生徒は学習意欲がありましたから、なんとか LL 授業を実践できました。

(2) 中学校での実践

私はその2年後に、東京教育大学附属中学校(現筑波大附属中)に転任しました。そこでも、LL 教室ができたばかりだったので、わずかな経験がとても役に立ちました。生徒はとても優秀で、発音などほぼテープの通りに真似をしていました。LL の効果は、利用者の意欲と能力に大きく影響されるという印象を持ちました。

機器を使わずに音読の練習をさせるときは、一人一人読ませて、アクセントやイントネーションを間違ったときは、指揮棒で教卓をこつんと打つことにしました。8割くらいの生徒はすぐに気づいて、訂正できました。気づかない生徒には、間違った単語などを示したり、後について言わせたりして矯正できました。これも、LL での訓練の成果だと思いました。反復練習は優秀な生徒にも必要なのです。

(3) 東京電機大学での試み

附属中学で2年ほど過ぎた頃、ある知人から、「神田の東京電機大学で新校舎を建て、そこに大規模な LL 教室を設置する計画がある。英語のスタッフには経験者がいないので、担当者になってもら

えないか」という話がありました。私は「生涯中学か高校の英語教師で過ごすつもりなので、移るつもりはないが、助言くらいはできるかもしれない」といった返事をしました。学部長は東大工学部出身のまだ40歳代の方でしたが、会ってみると、とても教育熱心で、大学教育のあり方や視聴覚設備の活用法などを情熱的に語ってくれました。

何度かお会いするうちに意気投合してしまい、わずか3年間で附属中学を去ることになりました。

結局当時(1976頃)で、LLの予算4,000万円が、6,000万円になりましたが、96ブースを2教室完成させ、160人から180人のクラスを同時に指導しました。助手3名と、非常勤助手も2名を新しく採用してもらい、授業は3名で担当しました。

当時としては珍しい小型テレビモニター(モノクロ)を各ブースにつけ、教材提示用のカメラには優秀な性能のものにしました。

2年後に学園紛争が起こったときの学生の要求には「機器利用によるマスプロ教育の廃止」がありましたが、「LL授業の良さは認める」という学士の声が多くて、彼らもLLについては廃止要求を撤回してくれました。

(4) 筑波大学外国語センター

電機大学で7年くらい経ったとき、筑波大学から招聘されました。まったくの新構想大学ですから、それまでの国立大学と違って、予算が豊富でした。3年間で約3億円をかけて、500ブースのLLを作るということで、大規模LLの設置と運営に経験のある私に依頼がきたのでした。

最初の3年間はメーカーとの交渉にかなりの時間を使いました。厳密な入札制度ですから、困ったのは、入札のための詳細で公平な仕様書を作らなければならないことでした。そこで、電機大学の卒業生で、私のLL授業を受けた経験もあり、機械にくわしい一人を技官として採用しました。

当時は、ようやくカセットテープレコーダーやカラー・モニター及びVTRなどが普及し始めた頃で、どの機種にするかはとても大事な判断でした。

400ブースくらいが完成したとき、授業計画を考えると、それ以上のLLは必要ないことがわかりました。しかし、事務局からは「すでに認可された予算は必ず使ってほしい」と言われて、帰国生用の小LL教室とか教職員用のLLとか、なんとか名目をつけて設置しました。“国費”は無駄使いをするものだとその頃に痛感しました。

当時の機器が、もう部品の製造がなくなって補給できないのですが、いまだにどうか使用に耐えていて、英語教員になった教え子から、「先生の設置したLLを使っていますよ」という報告を聞くのは朗報でした。

(5) 東洋学園大学時代のこと

筑波大を辞した後は、新設の東洋学園大学(千葉県流山市)で10年間お世話になりました。視聴覚教育センター長でしたから、校舎建築の予定が発表になると、理事長に頼みこんで予算をもらい、教室の視聴覚設備を設置しました。当時は、各社がプラズマテレビの開発を始めた頃ですが、40インチくらいのもので、1

台 100 万円以上でしたから、手が出ませんでしたので、ブラウン管方式の最大のことで我慢しました。しかし、外国語に限らず、ビデオ教材の使用が盛んになって、使用率は結構高くなっていました。

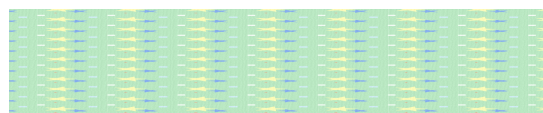
コンピュータ教室もいくつか完成して、授業でも使えるようになり、私は「CALL 実習」を1つ担当しました。

会話教材を「書き取り教材」にした市販のソフトを使ってみました。20 名くらいのゼミのクラスですから、教えやすかったのですが、従来の LL に比べて便利だとは思えませんでした。

1つには、当時の市販教材は自習用が主でしたから、最後には正答が見られるので、学生の中にはいい加減にやって、正答を見てしまう者もいました。またインターネット上の辞書を探し出して使う者もいました。

現在の CALL はさらに進歩していると思いますが、学習者が画面で何をどこまで出来るかということと、指導者が何をどこまでコントロールすべきかは十分に検討すべき問題のように思いました。これは現在でも大きな課題であろうと思います。

編集後記



「LLA シニア通信」の第1号をお届けします。第2回シニア会の会合の報告にも書きましたように、せっかく集まって話し合いをするならば、それをある程度記録に留めたり、出席できなかったメンバーにも発言の機会を設けたりするために、会報というほどおおげさなものではなくても、何か「通信」か“Newsletter”のようなものがあつたほうが良いであろうということで、こういうものを作りました。これはその第1号です。

とりあえず、大八木と浅野が幹事になって、連絡、編集の役を引き受けることにしました。技術的に未熟なところがありますが、関係者各位の情報交換の役目を果たせることを願っております。

今回はそれぞれのご都合で、大井上、栗山、国吉、宇佐美、鈴木の各氏からは原稿をいただけませんでした。次回にはぜひお願いいたします。発行は不定期ですので、原稿が集まった時点で発行するようにいたします。